

## シンフォニエッタ

1

紙が舞っている、激しくばらばらに  
俺にぶつかってくる、この目に  
俺に強いる、鈍痛の道を  
ああ、紙だ、舞っている

2

行くな、行くなと父神は叫ぶ<sup>ちちがみ</sup>

天上から下り来て叫ぶ<sup>くだ</sup>

人の足首をつかむ、テリアのように

人の前には闇夜への階段

‘あの人々を助け出さねばならぬのだ、父よ’  
人は、縋る父を無理矢理引き摺り、行く

独り立ちする人々の無事ならんことを  
暗黒に光の生まれんことを  
独り立ちする人々の力の枯れぬことを、祈れ

3

写真はアルバムを開けばいつもあれども  
記憶に映像は鮮やかなれども

あの女<sup>ひと</sup>の声は思い出せない

ささやきたまえ、思い出の姿よ  
ささやきたまえ、この耳に  
ああ、声なき映像に、魚の如くのみ唇に  
充たされぬ我、今日もうんうんと身悶える

4 H.ヘッセに捧ぐ

うらめしい音楽よ、聞きたくもない

白痴に生まれなかった運命を呪う  
ああ、脆く、儂く、揺るぎないモーツァルトよ  
人々を惑わす大なる悪党よ、麻薬よ  
咳が出るのに自棄糞に煙草を吸うような  
こんな俺には、お前は正しく麻薬  
咳が出る、咳が出るよ  
なおレコードをかける意地っ張りな俺を  
悪魔モーツァルトよ、笑わば笑え

5

ああ、逃げないで小鳥  
気紛れな翼、軽い身体を  
いつまでも私の前に・・・  
逃げないで、頼むから  
そっと眺めているだけの私から

6

白い茶碗を倒してしまった  
茶碗はころころと転がってゆく  
流れ出た渋色の茶の上を  
ころころと滑ってゆく  
殺ってしまった、為す術はない  
茶碗は倒れて滑る、ころころと

7 (1982.1.28 の思い出) 太宰治に寄す

小雪降る駅前広場の与太者は何を思うか  
太い鉄棒で黒い地を引っ掻く、ガリッガリッと  
うすぼんやりとした闇の中、火花は散る

その火花は見つめる、バス待つ人々の顔の  
何と呆けた、間の抜けた馬鹿面よ  
冬の火花の間抜けさは、これら愚鈍の顔にある

与太者よ、小雪の中、なお火花を散らせ  
この小雪にきらめく無垢な希望を知るのは

この思い冬の夜の情緒を量り得るのは、ただお前のみよ

8

嘆くなかれ、豆腐屋の見習いよ  
そんな大きな豆腐は水から出すと  
自ら崩れてしまうことが分かったろう  
何せこんなことを知らない奴は  
そんじょそこらにうじゃうじゃ居って  
そうしてやっぱりそんな奴等も  
自ら崩れてしまうという訳なのだ

9

彼は女の裸身にしがみつく  
悲歎に暮れ、絶望に暮れ、わあわあ叫ぶ  
‘ああ、死にたい、死ぬよ’と  
そして彼はなおも力をこめ、抱き締める  
生命の母、彼女のふくよかな柱をきつく  
ああ、この喜劇、この笑劇  
この結合より子の生まれることを、望むべきや否や

10 (削除)

11 (1980. 8の思い出)

貴方は真直ぐにこっちを見つめた  
ところで貴方が見つめていたものは  
僕を素通りして遥か遠く、僕じゃないのだ

貴方は真直ぐにこっちにひょうと矢を射た  
心ここにはない眼差しで、僕をじゃなく  
ああ、そんな目で僕に視線を向けないで！

12 (1980. 8の思い出)

がらんと大きな部屋の真ん中  
ごろんと僕は大的字さ  
広さは哀しみを散らしも薄めもしない

むしろ広さは俺の胸に攻め寄せ  
哀しみを次第次第に圧縮するのだ  
そうならば当然圧力は汗を噴き出すほどにふんばり  
哀しみもまたぐつぐつと熱くなるという訳

(1982.4.18)